

林原美術館NEWS

HAYASHIBARA MUSEUM OF ART NEWS 平成15年4月1日

Vol.

5

平成十五年度 林原美術館展覧会等

常日頃、林原美術館の展覧会をご観覧いただくとともに、種々のご支援を賜り皆様には心よりお礼申し上げます。

林原美術館も開館三十九年を迎えました。開館以来、当館の所蔵品を中心に展覧会を開催してまいりました。

昨年度は特別展三回・企画展二回を開催いたしました。その間所蔵品の整理のため、約三ヶ月程休館し、友の会会員の皆様を含めて大変ご迷惑をお掛けいたしました。

今年度は、当館所蔵品を中心とした展覧会を計画しており、特別展一回、企画展四回を開催いたします。

当館の所蔵品による企画展として、四月十三日から開催します。大名池田

家の名宝「展は、当館の中心的なコレクションでもある、

大名池田家に伝わる名宝の数々を紹介します。六月十

五日からは、日本の陶磁器の中から、美しいデザイン

の鍋島焼と土色が味わい深い備前焼を取り上げた、日

本のやきもの 鍋島と備前

「展を開催。年明け一月四

日から、多ジャンルにわたって縁起物を展示する

「瑞祥」展。最後に、二月二十二日から「うるしの世界

たします。

九月二十一日からは、特別展「みずのきの絵画展 無心の画家たち」を開催いたします。京都府亀岡市にある知的障害者更生施設「みずのき」に入所されている方々の作品は、国内外から高く評価されています。異なった個性を現し、完成度の高い作品の数々を紹介する絵画展です。

恒例行事としましては、六月に「美術館周遊の旅」、七月に「美術講座」を十月に「伝統工芸探訪の旅」を計画しております。

今後とも、美術館の活動内容にご理解いただくとともに、更なるご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



山本一男 「顔」 1984年 二科美術展入賞作品(特別展出品予定)

展覧予定

企画展「大名池田家の名宝」

4月13日(日)～6月8日(日)

企画展「日本のやきもの 鍋島と備前」

6月15日(日)～8月10日(日)

特別展「みずのきの絵画展

無心の画家たち

9月21日(日)～11月24日(月)

企画展「瑞祥」

平成16年1月4日(日)～
2月15日(日)

企画展「うるしの世界 蒔絵と彫漆」

2月22日(日)～3月28日(日)

第3回
美術館周遊の旅

6月7日(土)

「足立美術館」訪問

第36回

林原美術館美術講座

7月12日(土) 13時30分～15時

演題「茶の湯の美意識」

講師 国立民族学博物館教授 熊倉 功夫氏

第5回
伝統工芸探訪の旅

10月18日(土)

「うるしの世界」

真庭郡川上村漆の植栽地と郷原漆器の見学

各イベントの詳細は別途ご案内いたします。
心あててご参加下さい。

企画展 「大名池田家の名宝」

4月13日(日)～6月8日(日)

当館の所蔵品は先代社長、故林原一郎氏のコレクションと備前池田家から引き継いだ伝来品との二本柱から成り立っています。今回は戦国武将として武勲を立てて姫路城を築いた池田輝政と、輝政の孫で備前池田家の基礎を築き名君と言われた池田光政の遺品を中心に、池田家に伝わる大名道具から日本の伝統の美と技を堪能いただけます。



黒漆泊蝶紋螺鈿矢筈(部分)

企画展 「日本のやきもの 鍋島と備前」

6月15日(日)～8月10日(日)

主に染付・赤・緑・黄彩を併用した色絵磁器で、藩営の窯で作られたために技法、文様ともに精巧を極めた鍋島焼。それに対し、須恵器を母体として生まれ、素朴ながら異種様々な姿を持ち、無限の土肌の変化を味わう備前焼。わが国の代表的なやきものである鍋島焼と備前焼を比較鑑賞します。



色絵鶴鴉文五寸皿 鍋島焼



三角水指 備前焼

特別展 「みずのきの絵画展 無心の画家たち」

9月21日(日)～11月24日(月)

みずのきは一九五九年に京都府亀岡市に知的障害者更生施設として設立されました。重度の知的障害を持つ約百人の方々が共に生活する中で、基本的な生活の技術を身に付け、園芸などの活動を通して自立を目指して暮らしています。一九六四年、この施設の中に情操教育と余暇活動の一環として、画家・西垣篤一氏主宰による絵画教室が開かれました。はじめは絵筆や絵の具など道具の使い方がわからなかった彼らに氏は忍耐強くかわり、十数年の年月を経て、彼らの中に潜在していた能力が見事に開花していきました。国内での数々の公募展への入選を果たし、一九九四年にはアジアで初めて、スイスローザンヌ市立アルブリット美術館に三十二点の作品が永久収蔵されるまでになり、その芸術性の高さが世界的に評価されました。みずのきの絵画活動の第一の目的は、アートを鑑賞し、制作するというプロセスを通して、障害のある無しを超えて、人として相互に認め合う関係を築き、時代に左右されない精神の豊かさを追求していくことにあります。彼らが生み出す質の高い作品はきつと我々に深い感動を与え、差別感を解消し、人と人のかかわりの重要性「を考える良い機会になるのではないか」と思います。



岡本由加 「カボチャ」

企画展 「瑞祥」

平成16年1月4日(日)～2月15日(日)

当館の所蔵品の中から多分野にわたって良い事の兆「である瑞祥」を表す作品を展示します。それともにおめでたい縁起物を紹介いたします。縁起とは、そもそもは物事の起りを表し、何かをはじめる時に良い結果になるかどうかを判断する材料を示します。新春にふさわしく、良い縁起を祝うための縁起物との出会いをお楽しみください。



立涌に巴文様金襴袷狩衣

企画展 「うるしの世界 蒔絵と彫漆」

2月22日(日)～3月28日(日)

数ある美術品の中でも、染織関係と並んで保管が難しいとされているものがこのうるし(漆工芸)です。その脆弱さ故に貴重で昔から大切にされてきました。日本の伝統文化が息づく近世江戸時代を中心とした華やかな蒔絵の世界と、派手さは無くとも深い味わいを持つ元時代から明・清時代(十四世紀～十八世紀)にかけての中国の彫漆の世界をご覧ください。



梅若松蒔絵雜道具ノ内厨子棚飾

友の会のご案内

美術館「友の会」ただいま会員募集中です。

林原美術館では、平成十五年度の美術館「友の会」の会員を募集しています。会員の方は、美術館の企画展が会員証にて無料でご覧いただけます。また、ご同伴の方が、どなたでも1名様まで無料になります。特別展では三〇〇円引きの入館料金となります。このほか下記の館外行事への会員料金でのご参加、館内で販売している図録、オリジナルグッズが割引料金でご購入いただける等の特典があります。会員の方には、展覧会のご案内、美術館ニュースなどの美術館の情報をお早くお届けします。皆様と林原美術館とを、より身近にお付き合いいただく為の「友の会」です。この機会に是非ご入会ください。

個人会員 一年Ⅱ(新規)三、〇〇〇円
(継続)二、七〇〇円

法人会員 一年Ⅱ(新規)三〇、〇〇〇円
(継続)二七、〇〇〇円

有効期限 一年会員 平成15年4月1日～平成16年3月31日
三年会員 平成15年4月1日～平成18年3月31日

入会のお申し込みは、随時お受けいたします。
(*有効期限は記載通りです。本年より一年会員で継続くださる方は、1割引となりました。
詳しくは、美術館スタッフ、友の会事務局(☎086-223-1733)までお尋ねください。



平家物語絵巻

イベントのご案内

第三回 美術館周遊の旅

6月7日(土) 足立美術館訪問

今回の美術館周遊の旅は島根県安来市の足立美術館へおじゃまします。

足立美術館は日本有数の近代日本画のコレクションを有しています。その画家の作品はどれも芸術的に価値の高いもので、代表的な作品に横山大観の「無我」、橋本関雪の「猿」、村上華岳の「観世音菩薩」などが挙げられます。

この度は、夏季特別展「横山大観と日本画の巨匠たち」を、足立美術館の学芸員の方に解説いただきながら、明治時代の日本画の巨匠たちの作品を鑑賞したいと思えます。

また、合わせて枯山水庭、白砂青松庭、苔庭、池庭と続く美術館の庭園の美しさもお楽しみください。道中鳥取へも足をのばし、大山のふもとに広がるとつとり花回廊へも参ります。

季節の花々と秀峰の大自然の景色を合わせて堪能いただき、旅の思い出に花を添えてください。

*定員は45名を予定しております。



白砂青松庭 (6月頃)

第三十六回 林原美術館美術講座

7月12日(土) 13時30分～15時

会場 岡山県立美術館 講義室
講師 国立民族学博物館教授 熊倉功夫氏
演題 「茶の湯の美意識」

熊倉功夫氏プロフィール

一九四三年東京生まれ
東京教育大学文学部史学科卒業
日本文化史専攻 文学博士
京都大学人文科学研究所講師
筑波大学教授を経て

一九九二年より国立民族学博物館民族文化研究部教授。茶道史を中心に日本の料理文化史、柳宗悦など幅広く研究。

主な著書

「茶の湯の歴史」朝日新聞社
「文化としてのマナー」岩波書店
「日本料理文化史」人文書院 その他多数。

第五回 伝統工芸探訪の旅

10月18日(土) 「ふるこの世界」

漆は古くから日本で使われてきた天然の塗料です。現在、岡山県郷土文化財団と協力して林原グループも備中漆復興事業を支援しています。

今回は、蒜山高原にある旭川の源流「塩釜」を散策しながら、川上村の漆の植栽地を見学します。その後、郷原漆器の館を訪れ、伝統的な漆器の製作工程を見学する予定です。「郷原漆器」を中心に「備中漆」の美しさと良さを感じていただく旅です。



郷原漆器の漆ぬりの作業風景

林原美術館の名品から

桜九曜紋三所物

石黒政美作 一組 江戸時代

今回は刀装具の一種である三所物をとりあげた。聞き慣れない言葉であるが、漢字から何が三所、下のものではないかと想像することは易い。しかし写真を見てみると四つある。だがじっくり見ると、金色の小さな物はまるでカマスカイヤリングのまわりに二組になつていて、三所物だと分かる。刀装具とは読んで字の如し、刀を装飾するものである。武士の魂である刀剣は普段は休め鞘として朴木で作られた白鞘に入れて保管される。しかし、私たちがテレビの時代劇等で見る刀は、白鞘入りではない。木製の鞘に蒔絵や螺鈿などで装飾したものを、黒色の鞘が多いのではないだろうか。これは拵として、それ自体は本身(中身)の刀剣同様、武用としての機能性から成る物だが、拵えるとい



桜九曜紋三所物 銘 石黒政美(花押)

言葉通り、武を装飾するといつ性格性を持っている。儀典規範や時代の流行によつてその形態は変化するが、身につける武士の嗜好や自己主張が次第に強く表れるようになっていた。その拵に付属品が付いており、その代表格が三所物の表側(外側)に拵が、拵とは写真下段にある一番長く先の尖つたもので、髪掻きが訛つたものだが、本義は簪(まげ)にさす飾りである。昔は今と違って烏帽子や兜をかぶっていたため、頭を掻く時、このような先の尖つた物が必要だったのである。反対側の丸い部分は耳掻きである。髪掻きと耳掻きの一体型がこのようなお洒落な形をしていたとは全く驚きである。鞘の表側に拵を入れる櫃、つまり孔が開いていてそこに差し込んで収納する。次に写真上段右側にある長方形の物を小柄(こぶ)といふ。向かつて左側の口が開いてそこに小刀を差し込む。拵と逆で、鞘の裏側に付く(側)に孔が開いていてそこに入れる。テレビではよく手裏剣のように投げて使われているが、元々は今で言うペーパーナイフで、髭なども剃つたと思われ、拵共々武士の身嗜みを整えるのに必要不可欠なものだったのである。三 points が金色の対になった目貫である。刀剣を持つ部分、柄の表から裏に差し通して刀身が柄から抜け出さないようにするための金具である。後に差し込みの足部分は目釘で代用し、頭は飾目貫となった。柄の中央部分に位置することから、目立(めだち)意味で、目貫(めだち)通りといつ言葉が生まれた。短刀では剥き出しになっている場合があるため、比較的わかり易いが、太刀や刀では柄が割れたりゆるんだりしないように目貫の上から革や組紐などで柄巻きをしている場合が多い。中々形や図柄までは判別しにくい。しか

し逆に言えば、そんな見えにくい部分にも細かな細工をする行き届いた感性は流石日本人と言えらる。これら小柄・拵・目貫の三所物は同じ文様で同一作者の手によるものである。江戸時代、刀装具には厳しい格式があり、大小の刀に小柄・拵を付けることができる武士は上級の者に限られていた。その中でも、大名や旗本の指料としての正式な拵には必ず幕府お抱えの金工師である後藤家製作の金具を用いることが慣例となつてきた。写真の文様は、中央のやや大きめの円形の周りに八つの小形円形を配列した九曜紋と桜紋から成る美に単純な構図だが、簡潔で美しく気品が感じられる。家紋から見て肥後細川家が町彫りの名手石黒政美に注文した品であることとされている。町彫りとは、後藤家以外の金工の総称で、後藤家の家彫りに対する名称である。後藤家の型にはまた彫刻にあきたらず、写実的な絵画風の彫刻を試みたことに端を発し、時代の自由な風潮にも乗り、後には家彫りを圧倒するほどの勢力となった。九曜紋は元々インド占星術から由来し、中央に土星が位置し十二時の所に水星、そこから時計回りに残り七種の星が配列し天地四方を守護するといわれている。日本では江戸時代によく用いられた家紋で、変形の八曜紋や北斗七星を形どつた七曜紋共々、九曜を吉祥視していた。目貫は桜と九曜を象徴しているが、小柄と拵は、赤銅地に、魚の卵のように見えるところから魚子(いしなご)と言われる。粟粒を敷き詰めた地模様の上に桜紋と九曜紋を金紋で散らした格調高い作品となっている。今後、拵や刀装具の展示を見る時に少しでも参考にしていただければ幸いである。

(学芸員 島村千秋)

編集後記

「林原美術館ニューズ」も5号目を数えました。前号から紙面もリニューアルし、さらに見やすく、わかりやすくつとめております。

今年度の展覧会は、特別展を1回、当館所蔵品による企画展を4回と、林原美術館の所蔵品を見たい」といってお客様のご要望にお応えする形となりました。

また、恒例となりました美術館周遊の旅、美術館講座、伝統工芸探訪の旅も予定されております。展覧会ともども多くの方々のご参加をお待ちいたしております。

では6号もどうぞお楽しみに。()



〒700 0823 岡山市丸の内一七 一五
TEL 〇八六 二三三 一七三三
財団法人 林原美術館